

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 066

(2023/24年度 USDA米国農務省 1月12日発表)

[ハイライト]

① 世界の穀物需給は安定、市場価格も低位安定。ただし、為替円安 / FRT高騰で実需価格は上昇のまま

年初の世界穀物市場は、一昨年2月のロシアのUKR侵攻以降の歴史的な暴騰局面から全体的には落ち着き、過去1年総じて下降トレンドを辿って現在に至っている。具体的な前年同期比価格動向は下記に示す通りであるが、為替は昨年1月\$1=130円⇒145円と15円の円安、US Gulf-日本のPMX FRTは同\$45.6⇒\$56前後と約\$10高騰している。その結果、小麦政府売渡価格(10月~68,240円/ト)や配合飼料価格(1月~工場渡98千円程度)と2年前と比べ2-3割程度の高値水準のままとなっている。

② エルニーニョ現象などの気候変動により、今年度豪州小麦生産は大幅にダウン。カナダ含め日本の小麦輸入に影響か

昨年度大豊作だった豪州穀物生産(小麦41/大麦その他19百万ト)は、今年度早魃の為小麦26百万トと前年比約4割15百万トの大幅減少。大麦その他も19⇒13百万トと6百万ト落ち込む見通し。しかしながら、過去10年平均比では両品目とも約4%の減少に留まっている。要するにこの変動の大きさが豪州の特徴である。同様にカナダの作況変動も大きく、昨年度小麦生産31⇒27百万トまで減少し、この両国の動向は日本の小麦輸入元判断と配船に大きな影響を与える可能性がある。

③ 今年度の中国の食糧生産量は史上最高を記録、輸入数量拡大も含め世界最大の食糧消費大国の座は不動

12月の中国国家統計局の見通しでは、今年度食糧生産量は前年比1.3%増の6億9,500万トと史上最高見通し。品目別では小麦1.37億ト/コーン2.90億ト/コメ2.06億ト/大豆0.2億ト。特にコーンは4.2%増と全体を底上げしている。また国内穀物需要は20年前(2003年)比1.7倍、大豆需要は3.5倍と食肉需要拡大に平行し急拡大し、国内生産では賄え切れず穀物輸入増加に繋がっている。USDAの今年度中国穀物見通しでは、特に大豆1億ト超/コーン2,300万ト/小麦1,250万ト/コメ280万トと約1.5億トとなり、これも飛び抜けた世界最大の穀物輸入大国である。ある意味ブラジル大豆畑はさながら中国の大豆畑とも言える。

1. 世界穀物需給の概要(大豆除く)

① 生産量:	2,812百万ト (前年比2.3%)	増 ↑、前月比0.3%	増 ↑)
② 消費量:	2,811百万ト (前年比1.7%)	増 ↑、前月比0.0%	増 →)
③ 貿易量:	501百万ト (前年比1.2%)	増 ↑、前月比0.3%	増 ↑)

2. 小麦

① 生産量：	785百万ト（前年比0.5%	減 ↓、前月比0.2%	増 ↑）
② 消費量：	796百万ト（前年比0.7%	増 ↑、前月比0.2%	増 ↑）
③ 輸出量：	210百万ト（前年比4.8%	減 ↓、前月比1.1%	増 ↑）
⑤ 在庫量：	260百万ト（前年比4.2%	減 ↓、前月比0.7%	増 ↑） / （在庫率 33%）うち中国134百万ト、占有率51%
④ 価 格：	<u>\$6.16/Bu</u> （前年\$7.44/Bu / 前月\$5.77/Bu）	と前月比\$0.39 上昇。	
⑤ 概 況：	世界生産量は、前月比 ロシア/UKRで各百万ト増加し全体で微増、前年比では <u>豪州/カナダの減産が大きく約5百万ト減</u> の見込み。消費量が生産量を上回っている為前年比11百万ト減少。輸出量は前年比千万ト減だが2億ト台維持している。		

3. とうもろこし

① 生産量：	1,236百万ト（ 前年比6.9%	増 ↑、前月比1.1%	増 ↑ ）
② 消費量：	1,211百万ト（ 前年比3.9%	増 ↑、前月比0.3%	増 ↑ ）
③ 輸出量：	201百万ト（ 前年比11.1%	増 ↑、前月比0.3%	減 ↓ ）
④ 在庫量：	325百万ト（ 前年比8.2%	増 ↑、前月比3.2%	増 ↑ ） / （在庫率 27%）うち中国212百万ト、占有率65%
⑤ 価 格：	<u>\$4.61/Bu</u> （前年\$6.54/Bu / 前月\$4.65/Bu）	と前月比\$0.04 下落。	
⑥ 概 況：	世界生産量は、前月比米国で単収増から 3 百万ト増、中国は 1 千万ト増等から全体で12百万トの大幅増。前年比でも米国増産から約70百万トの大幅増加見通しである。ただ消費量はそこまで追いついてない為在庫量は前年比53百万トの大幅増加。輸出量は前年比約20百万トと大きく増加し 2 億ト台を回復。価格は大きな変動なく低位安定。		

4. 大豆

① 生産量：	399百万ト（前年比6.3%	増	↑	、前月比0.0%	増	→	）
② 消費量：	384百万ト（前年比5.2%	増	↑	、前月比0.1%	減	↓	）
③ 輸出量：	171百万ト（前年比0.4%	減	↓	、前月比0.4%	増	↑	）
④ 在庫量：	115百万ト（前年比12.5%	増	↑	、前月比0.3%	増	↑	） / （在庫率 30%）うちBRA36/ARG26百万ト
⑤ 価 格：	<u>\$12.50/Bu</u>	（前年\$15.02	/	前月\$13.25/Bu）	と前月比\$0.75	下落。	
⑥ 概 況：	世界生産量は、前月比BRAで微減したが米国/ARGでカバーし変動無し、前年比では24百万ト増で <u>ほぼ4億ト</u> に達している。 中国輸入量が102百万トと全体の約60%を占め存在感を示している。価格は上記の通り12ト台半ばで弱含み。						

世界の穀物・大豆等の需給

2024年1月12日
米国農務省発表： 単位 1 0 0 万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,794	3,589	514	2,795	794
	2021/22		2,748	3,543	496	2,765	778
	2023/24	12月	2,803	3,577	500	2,810	768
	2024/25	1月	2,812	3,590	501	2,811	779
小麦	2020/21		780	1,064	203	791	273
	2021/22		789	1,062	220	791	272
	2023/24	12月	783	1,053	207	795	258
	2024/25	1月	785	1,056	210	796	260
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2020/21		1,501	1,824	254	1,486	338
	2021/22		1,446	1,784	221	1,454	330
	2023/24	12月	1,502	1,831	240	1,490	342
	2024/25	1月	1,514	1,844	240	1,492	352
米	2020/21		513	701	57	518	183
	2021/22		513	696	54	520	176
	2023/24	12月	518	693	52	525	168
	2024/25	1月	514	689	52	522	167
大豆	2020/21		360	461	154	363	98
	2021/22		375	473	172	372	102
	2023/24	12月	399	501	170	384	117
	2024/25	1月	399	501	171	384	117

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	12月	300.10	1,222.07	191.53	1,206.95	201.46	315.22
	1月	300.56	1,235.73	190.76	1,211.07	200.89	325.22
アメリカ	12月	34.58	386.97	0.64	314.72	53.34	54.12
	1月	34.55	389.69	0.64	316.63	53.34	54.91
アルゼンチン	12月	1.11	55.00	0.01	14.10	41.00	1.01
	1月	1.11	55.00	0.02	14.10	41.00	1.03
ブラジル	12月	10.27	129.00	1.20	77.50	55.00	7.97
	1月	10.27	127.00	1.20	77.50	54.00	6.97
EU	12月	7.23	60.10	24.50	80.20	4.20	7.43
	1月	7.23	60.10	23.50	79.20	4.20	7.43
日本	12月	1.30	0.01	15.50	15.50	0.00	1.31
	1月	1.30	0.01	15.50	15.50	0.00	1.31
中国	12月	206.04	277.00	23.00	304.00	0.02	202.02
	1月	206.04	288.84	23.00	306.00	0.02	211.86
ロシア	12月	0.91	17.00	0.05	11.60	5.30	1.06
	1月	0.91	17.00	0.05	11.60	5.30	1.06
ウクライナ	12月	2.80	30.50	0.02	5.50	21.00	6.82
	1月	2.80	30.50	0.02	5.50	21.00	6.82

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	12月	101.92	398.88	167.65	383.96	170.29	114.21
	1月	101.87	398.98	168.35	383.66	170.94	114.60
アメリカ	12月	7.30	112.39	0.82	66.06	47.76	6.68
	1月	7.19	113.34	0.82	65.97	47.76	7.62
アルゼンチン	12月	17.21	48.00	5.70	41.75	4.60	24.56
	1月	17.21	50.00	6.10	42.75	4.60	25.96
ブラジル	12月	35.35	161.00	0.45	59.70	99.50	37.60
	1月	35.35	157.00	0.45	57.50	99.50	35.80
中国	12月	33.79	20.50	102.00	120.50	0.10	35.69
	1月	33.79	20.84	102.00	120.50	0.10	36.03
EU	12月	1.32	3.07	13.80	16.59	0.30	1.29
	1月	1.32	3.06	13.80	16.59	0.30	1.29

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	12月	269.85	783.01	206.73	794.66	207.19	258.20
	1月	271.56	784.91	209.15	796.44	209.54	260.03
アメリカ	12月	15.83	49.31	3.95	31.43	19.73	17.92
	1月	15.50	49.31	3.95	31.41	19.73	17.62
アルゼンチン	12月	3.93	15.00	0.00	6.55	10.00	2.38
	1月	4.07	15.00	0.00	6.70	10.00	2.37
オーストラリア	12月	4.37	25.50	0.20	7.50	18.50	4.07
	1月	4.37	25.50	0.20	7.50	19.00	3.57
カナダ	12月	3.64	31.95	0.60	8.70	23.50	4.00
	1月	3.64	31.95	0.60	8.70	24.00	3.50
EU	12月	16.52	134.30	8.50	109.00	37.50	12.82
	1月	16.52	134.30	11.00	110.00	36.50	15.32
中国	12月	138.82	137.00	12.50	153.50	0.90	133.92
	1月	138.82	136.59	12.50	153.50	0.90	133.51
インド	12月	9.50	110.55	0.10	108.65	0.50	11.00
	1月	9.50	110.55	0.25	109.90	0.40	10.00
ロシア	12月	14.64	90.00	0.30	43.00	50.00	11.94
	1月	14.64	91.00	0.30	43.00	51.00	11.94
ウクライナ	12月	1.30	22.50	0.08	8.80	12.50	2.58
	1月	3.50	23.40	0.08	8.60	14.00	4.38

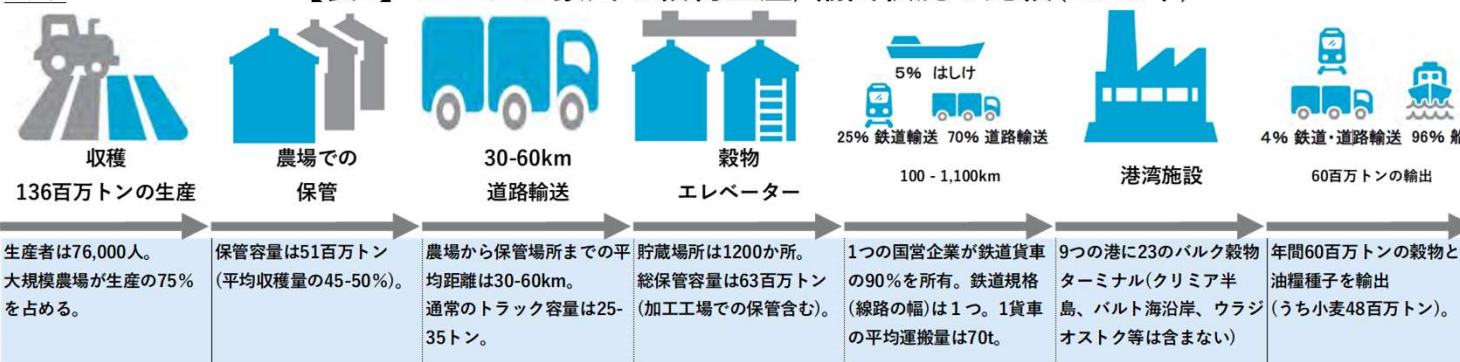
脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。
脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

世界主要国の農業と穀物需給の行方…ロシア(4)

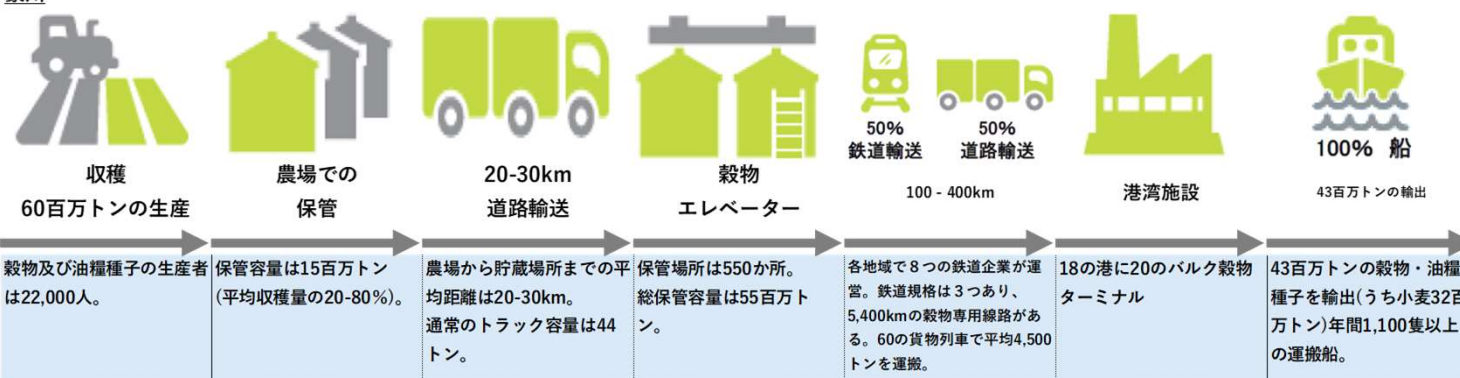
- ① ロシアの穀物生産が2000年台以降何故急速に増加し、輸出数量が拡大していったのか？については先月号でも触れたが、今回は生産から輸出までのそのサプライチェーンとコストについて焦点を絞って整理したい。また、比較対象としてロシアと中東/東南アジア等向け小麦輸出において競合する豪州の実態を取り上げてその違いと特徴について検討したい。
- ② [表1]はロシア/豪州両国の穀物生産⇒輸出までのフローチャートであるが流れの中での ①収穫数量 ②農場保管能力 ③穀物エレベーターまでの輸送形態 ④穀物エレベーター貯蔵能力 ⑤港湾施設までの物流形態 ⑥港湾輸出施設 ⑦船舶その他の輸出形態の概要を整理している。この表は2016年ベースであるが、入口/出口である①⑦の数字は大きく変動しているので22/23年数量を記載している。②～⑥は構造に大きな変化はないと想定している。
- ③ まず個別に見てみると、①の22/23年度ロシア穀物生産量は計136百万ト(小麦92/大麦22/コーン16/大豆6百万ト)で史上最高。豪州穀物生産量は60百万ト(小麦41/大麦その他19百万ト)の大豊作。②農場保管数量はロシア51/豪州15百万トであるが総収穫量比で言えば余り大きな差異はない。しかし、米国は総穀物生産量約6億トに対し農場保管能力はこの10年で約14%増加したとは言え約30百万ト(72.3億Bu)と小さく、効率よくカントリーE或いはリバーTや加工施設に流れる仕組みになっている。③の穀物エレベーターまでの輸送形態は米国(リバーも含む)も含め大半がトラックであり距離数/積載数量等の大きな差異はない。④穀物エレベーターの保管能力はロシアが63百万ト(平均5万ト)で収穫エリアが広大なため数は1,200か所と豪州の約2倍。豪州は55百万ト(平均10万ト)規模。一方、米国は72百万ト(181億Bu)と収穫量比で言えば規模は小さく、物流が両国に比べ効率的に流れている。
- ④ 更に輸出に向けての動きとして ⑤港湾施設までの物流は国状を反映しロシアは7割がトラックで内陸部からの長距離輸送も伴う、豪州は鉄道/道路が半々。米国は約7割が解輸送とそれぞれの特徴がある。⑥港湾施設についてはロシアの数字は確認できないが、豪州は100万ト規模の大容量サイロを構えているが搬出能力は1,000-2,500ト/Hと低い。一方米国の輸出サイロ規模は10万ト前後だが搬出能力は3,000-4,000ト/Hと高く効率的である。②④も含め各国のサイロ機能は産地状況/集荷範囲/河川等の自然条件/内陸消費地との関連/全体の施設能力等によって違ってくるが、輸出エレベーターについて言えば豪州等は集荷/保管機能の要素が強く、米国は小さな保管容量で回転が速い(100-200回転)ことが特徴。⑦ 輸出形態は、ロシアは一部鉄道利用があるが米国を含め大半は船舶が担っている。ただ豪州の生産量は年度によって大きく変動し、今年度小麦生産は旱魃で昨年の4割減の26百万トである。
- ⑤ [表2]は、ロシア/豪州のサプライチェーンの比較であるが、総コストはロシア=豪州ドル55.8/トに対し豪州=84.6/トとロシアは豪州の約6割程度のコストで収まっている。表中①～⑦の各段階コスト比較では⑤の港湾荷役を除き何れもロシアは豪州比約半額程度、逆に⑤はロシアが豪州比約倍額となっておりロシア物流コストの約4割を占め際立っている。また、両国の肥料/農薬/労働力/地代等のha当たり生産費はほぼ同一(394豪州ドル/ha)であるが、収量格差ロシア3.2ト/ha VS豪州1.8ト/haを加味したト当たり生産費は表⑨の通りロシア121/豪州216豪州ドルと格差は広がり、表⑩総費用は120 豪州ドル/ト余りの格差でロシアの優位性が明確であり、近年特にベトナム等の東南アジア向け小麦輸出を拡大し豪州の脅威になっている。(続く)

ロシア

【表1】ロシアと豪州の穀物生産/輸出状況の比較(2016年)



豪州



【表2】ロシア・豪州のサプライチェーン費用比較

	ロシア		豪州	
	(豪州\$/t)	%	(豪州\$/t)	%
①サイロまでの輸送費	3.46	6	7.80	9
②保管	5.13	9	9.00	11
③内陸荷役	9.21	17	18.40	22
④港までの輸送	15.52	28	26.70	32
⑤港湾荷役	22.19	40	13.10	15
⑥船積み	0.19	0	6.80	8
⑦輸出課徴金(関税等)	0.10	0	2.80	3
⑧SC総費用	55.79	32	84.6	28
⑨生産費	121.16	68	216.15	72
⑩総費用(豪州\$/t)	176.95		300.75	